

剣の流儀、心のスタイル

—柴田錬三郎の『眠狂四郎殺法帖』における剣とダンディズム—

山口 和彦

キーワード：剣の真髓 伝奇時代小説 円月殺法 運命との対峙 裏返しの
ヒューマニズム

I

剣の奥義を究めようとした10人の剣客の生きざまを描く作品集『生死の門』の「まえがき」に、柴田錬三郎は次のような文章を記している。

剣の真髓は、おのれの心身を、生死の境に置くことにある。

人間にとって、これほど、凄絶な瞬間はない。(中略)

私の知る限り、剣の真髓を知り、その奥義をきわめるために、生涯を斯道ひとすじにつらぬいた者の存在は、日本以外に見当らない。

もとより、剣そのものは、凶器であり、一步踏みはずせば、この修業を成した者は、地獄の世界に身を入れることになる。

そこに剣のおそろしさがあると同時に、並の人間では会得し得ない『心気一如』をさとることができる。『心』とは動くものであり『気』とは動かざるものである。相背反する二つを、ひとつに合せることができるのは、剣の真髓のみである。¹

柴田の指摘するように「剣の真髓を知り、その奥義をきわめるために、生涯を斯道ひとすじにつらぬいた者の存在は、日本以外に見当らない」とすれば、剣の精神は疑いもなく日本人の心性の一斑をかたちづくるものであろう。その意

味では柴田の代表作として知られる眠狂四郎シリーズも、この日本の精神を踏まえた剣豪小説の系譜をひく作品とみることができる。剣豪小説は剣の達人を描いた時代小説の一ジャンルであるが、眠狂四郎という奇妙な変名を用いる浪人者も、そうした日本の心性を分有する剣客の一人だからである。

しかし柴田の眠狂四郎作品は、従来の剣豪小説との共通項を有しつつも、なおかつその枠組みの中に収まりきれないものを持っている。それは作家独自の文体が独特の小説宇宙の構築に寄与している形式面にのみいえることではない。内容面でもニヒルな混血児としての主人公の性格造型に顕著な個性がみとめられる。柴田によれば、剣豪と呼ばれる兵法者の像は大きく二つに分けられる。「剣の道に入って、武を蟬脱し、名僧君子の寛仁の悟りの境地に到」るタイプと、²「生まれつきの才能を所有し、その上、幾パーセントかの狂気を所有して、無謀と思われる真剣勝負をくりかえして、無数の死地をくぐり抜けたタイプ」³である。前者を代表するのが塚原ト伝、上泉伊勢守信綱、柳生但馬守宗矩などであり、後者の代表格が宮本武蔵、神子上典膳、平山行蔵らである。

それなら眠狂四郎の位置はどうかといえ、市井無頼の徒として生きる狂四郎が前者のタイプでないことは明白であるが、では後者の範疇に属するかといえ、これにも留保が必要である。狂四郎は類まれな天稟を有し、「無数の死地をくぐり抜け」てきた剣の達人ではあるが、「幾パーセントかの狂気を所有して、無謀と思われる真剣勝負をくりかえ」すたぐいの豪勇型の兵法者とはちがう。狂四郎の生誕について語った作者のことばがある。

私は、眠狂四郎を剣豪として描こうとしたのではなかった。狂四郎に、現代の罪悪感を背負わせて、そのジレンマに苦しみながら生きて行かねばならぬ業を見たかったのである。いわば、剣豪が進む道とは、逆の方角へ歩かせてみるために、円月殺法をあみ出したのである。

斬られた方が、喪神する。だから、斬られる苦痛はない。斬った方は、人を斬ったという罪悪感を、意識の中に一杯にしている。逆なのである。⁴

ここには眠狂四郎を造型したさいの発想の核とでもいえるべきものが語られている。柴田の剣豪ものには、総じて自己の本分に忠実に生きようとする孤独な剣客を主人公とする作品が多く、その極北に位する人物の典型が眠狂四郎であるが、狂四郎の個性は正統的な剣豪のイメージを 180 度逆転させたその人間像の

特異性にある。いふなれば狂四郎は従来の劍豪とは対蹠的な位置に立つアウトサイダーであり、無頼の徒としての異端性を有しつつ、なおも劍の真髓を究めるといふ一点において、正面からではなく搦め手の側から劍豪の境地に比肩しうる精神性をそなえている。

このことは別言すれば眠狂四郎作品の特質が、たんに劍の魅力を描いたところにのみあるのではないということであり、またこの異端的劍士の造型を通じて劍の流儀と不可分一体であるところの精神のスタイルが表象され、さらにそこに自虐の内攻に裏打ちされた独特のモラリズムがダンディズムのヴァリエーションとなって噛み合されているということである。拙論は、このような観点からシリーズ7作品のうち主人公の劍の作法に焦点をあてた題名をもつ『眠狂四郎殺法帖』をとり上げ、近代的存在方式としてのダンディズムの美学を援用しつつ、主人公の劍の流儀とその劍を内側から支える心のスタイルを読み解くことによって、眠狂四郎という日本的ダンディの人間像を分節化しようとするものである。

II

『眠狂四郎殺法帖』は、第1作『眠狂四郎無頼控』⁵、第2作『眠狂四郎独歩行』に続くシリーズ第3弾として、昭和38年4月から翌39年3月まで『週刊新潮』に連載された。毎週ひとつの物語が読切りで完結する体裁をとりながら、全篇をつらぬくライトモチーフを内包する点では先行2作と同様の趣向であるが、通底する主題の扱い方はいくらか異なっている。『無頼控』では、本丸老中水野出羽守忠成一派と、敵対する西丸老中水野越前守忠邦との政争を背景に、主人公眠狂四郎の生きざまが描かれ、『独歩行』では、中央政界の権力争いに代わって、歴史の闇に生きる二つの集団——幕府覆滅を企てる風魔一族と、それを阻止しようとする幕府御用党黒指党——の闘いが通奏低音のように基底に流れ、その暗闘の渦中に身を投ずる狂四郎の、影に生きる独歩者としての漂泊に光があてられていた。

一方『殺法帖』は、幕閣内の熾烈な権力闘争を背景に主人公の劍の冴えを活写している点で『無頼控』に通じるものがあるが、道中記の性格を強めている点では『独歩行』に似た性格も有している。『無頼控』は江戸とその近郊を主たる舞台に、京、大阪、備前までの旅を内包する物語として組み立てられてい

るが、『独歩行』では江戸市中に加え、日光街道とその周辺地域を含む一帯が舞台となり、『殺法帖』でも江戸を基点に、成田、佐倉、房総などへの旅と、中山道、北国街道、北陸道を経て奥能登へ至る道中が相当の分量を占める構成となっている。⁶ つまり『殺法帖』は、江戸八百八町のみならず、狂四郎がめざす目的地までの旅路とその近在の習俗や世態風俗が、主人公の独特な生のかたちを印象づける結構となっているのである。

さて、このように背景と結構を整えたうえで、『殺法帖』では幕府、加賀藩、加賀の豪商銭屋五兵衛の三者に係わる大規模な不正の真相を、眠狂四郎が解き明かすプロットが紡がれていく。事の発端となるのは、西丸老中水野忠邦邸から佐渡金銀山の盛衰に関する秘密調査の書類が消え失せる事件である。佐渡からの公儀上納金をめぐってある疑惑が生じ、真相究明のために水野忠邦は10名の隠密を密かに佐渡へ差し向け、5年の歳月を費やして実態を調べ上げさせたが、その極秘調査の書類が何者かによって奪われたというのである。忠邦の側用人武部仙十郎から招請をうけた狂四郎が、敵方の刺客6名をたおして水野邸へ赴き仙十郎と対面すると、過去10年間に公儀に納められた年平均の年貢金約90万両のうち11万両を佐渡上納金が占めていること、そして消え失せた書類にはその10年間の公儀下げ金と上納高の不正がつぶさに記されてあった事実が伝えられる。

さいわい書類が邸内から持ち出された形跡はないが、その日の正午に、将軍家斉の55番目の子を懐妊したというお手付中臈が宿下がりの途次、後見役である忠邦への挨拶のために水野家上屋敷へ立ち寄るといふ。仙十郎はその行列出立時の人混みに紛れて書類が持ち出されるのではないかと懸念し、狂四郎にそれを未然に防いでもらいたいというのである。やがて十万石相当の格式をそなえた行列が到着し、休息を終えて一行が出立するさい、懐妊を装った着物の下に忍ばせて当の中臈が書類を持ち出そうとするのを狂四郎が看破し、いきなり無想正宗を鞘走らせて着衣を両断する。狂四郎の愛刀が一閃するこの瞬間こそ、亡き妻美保代と生き写しの相貌をもつ中臈千佐との運命的な出会いの場面であり、これ以降、狂四郎を慕う千佐の運命がサブプロットとして物語に織り合わされていく。

事態が思わぬ方向へ動きはじめるのは、日本各地の忍びの流派を継いだ者たちが暮らす三田寺町のとある住まいに、狂四郎が忍び込む第2話「風の如くに」からである。この一郭には、桜田の御用屋敷内に住まう庭番（公儀隠密）とは

ちがって、いまも能く各々の流派を守って厳しい修業をつづける面々が居住しており、忠邦はこの忍者郭から10人を選び出し、誓紙をとって佐渡へ遣わしたのであったが、その後の消息が明らかな者は一人としていなかった。本丸老中側がこれら10名を襲撃させたものと推測されたが、そのうちただ一人、能登に起源をもつ無影流の宗家戸越嘉門だけは、最後まで生き残っていたことが知られていた。しかも嘉門は、忠邦に届けられた書類よりもさらに重要な調書を持っていた可能性があるという。その嘉門の家に狂四郎は忍び込み、妻女の態度いかんによって嘉門の動静を探り出そうというのである。

こうして無影流戸越家当主の消息を糸口に、物語は佐渡金銀山からの上納金をめぐる大掛かりな抜け荷買いの疑惑へとひろがりを見せる。背後には、将軍家斉の菓餌に西洋製の麻薬を混じ入れ、痴愚同然にして権勢の座を守ろうとする本丸老中一派の企みと、鎖国を廃して開国への道をひらこうとする銭屋の野望、そして銭屋と利害関係で結ばれる加賀宰相の思惑が潜み、さらにそこに奥能登の名門時国館の来歴や無影流宗家の人間模様なども絡みあって、伝奇時代小説らしい“花も実もある絵空ごと”の物語世界が現出するのである。

全50話の1篇1篇で読者を愉しませる演出と趣向を凝らすのが柴田流の小説作法である。たとえば第3話「臥竜梅」で、少林寺拳法を初めて日本に伝えたとされる陳元賛の末裔陳孫が拳法の達人として登場し、それ以降、陰になり日向になって狂四郎を支える役回りを演じていくのは『殺法帖』の新機軸といえるし、1829年に国外追放となったはずのシーボルトが密かに銭屋の江戸別邸に軟禁されていたという設定（第14話「水中の家」）なども、いかにも虚実綯い交ぜの物語らしい着想である。また凄艶なエロティシズムが物語の随所で妖しい彩りを添えるのも狂四郎作品に欠かせない趣向であるし、四季おりおりの自然描写や庶民生活の哀歓がしっとりとした情緒をかもしだす演出もおこたらない。さらに宝探しの要素をもった謎解きや推理が物語に別種の妙味を添えるのも特徴のひとつで、この作品でも佐渡からの公儀上納金をめぐる謎に狂四郎が係わっていくプロセスに工夫が見られる。

もちろん、シリーズにお馴染みの顔ぶれが物語にアクセントを加えていることも見逃すことができない。狂四郎の一の乾分を自認する巾着切りの金八は、例によって早合点で勇み肌の江戸っ子気質を發揮するし、読本作者で講釈師の立川談亭は諧謔味と洒落っ気あふれる人柄で、その存在自体が一服の清涼剤となっていて、講釈場での名調子も読者の溜飲を下げてくれる。これら個性的な

面々が狂四郎の脇を固め、主人公のダンディズムの陰翳を際立たせる一方で、敵対する本丸老中側にも曲者が揃っている。なかでも異彩を放っているのは、幕府要人を凌ぐほどの貫禄をもつ銭屋五兵衛で、五兵衛は狂四郎にいくども煮え湯を吞まされながら、ふしぎと両者のあいだには一種親密な関係が成立している。それは譬えていえばシャーロック・ホームズとモリアーティ教授のあいだに成立する憎悪愛とでもいうべき心情に近いもので、両者は敵対しつつも互いを誰よりも知り、理解し合える間柄なのである。

そして、こうした荒唐無稽ともみえる筋書きや設定をリアリティある小説世界へ統合するのが、漢文脈を基調とする明晰で律動感あふれる文体であることはいままでもない。簡潔で節度あるその周到な語りのスタイルを、秋山駿氏は「人物月旦の話法」になぞらえているが、文芸批評の技法の一種であるこの手法は「ラ・ロシュフーコーなど十七世紀モラリスト達の、人間探求、人性批評、現に目の前にいる人達への人物月旦としてのマクシム（箴言）アフォリズム（警句）に基づ」くもので、「剣士の人間像や剣の立ち合いを浮き彫りに」するのにふさわしいという。⁷ 要するに、このような形式、内容両面での創意と技法が、史実とフィクションが渾然一体となった仮構の小説宇宙の創出につながっているのである。

III

しかしこの作品の最大の見所は、『眠狂四郎殺法帖』の題名が示すとおり、主人公の剣の美学が前面に押し出され、その流儀を通じてダンディとしての眠狂四郎の精神のスタイルが浮彫りにされることである。剣豪小説の醍醐味である剣戟描写がふんだんに盛り込まれるのは当然としても、剣の奥旨や流派ごとの特徴、構えのちがいなどが説明され、併せて兵法者の心得や“間合の見切り”といった用語も解説されることで、斬り合いの構図が明らかになり、真剣勝負のリアリティが増す仕掛けになっている。⁸ たとえば第30話「海辺の決闘」では、心形刀という剣の極意「胎内刀」についての記述があり、⁹ 第35話「北辰一刀流」では、新陰流、天真正伝神道流と並ぶ剣術三流派のひとつ一刀流について解説を附したうえで、¹⁰ 一刀流古法に独自の工夫を加えて北辰一刀流を開いた若き剣客千葉周作と、やはり一刀流の流れをくむ剣の使い手である狂四郎との立ち合いが描かれている。また第42話「富田流小太刀」では、加賀藩のお止め芸であ

る富田流小太刀を継承する十四代当主富田小太郎一政が、領内への狂四郎の入国を阻止せよとの藩命をうけ、狂四郎に立ち合いを挑む場面が次のように描写されている。

「とおっ！」

澄みきった山気をつらぬいて、小太郎は、入り身の型を矢止めの型へ転じた。

攻めから受けに変え乍ら、その剣気は、全身から無数の光芒を閃かせるような鋭さを加えていた。

——これは、できる！

受けの強さが、これほど五体にそなわる、ということは、並たいていの修業ではない。

のみならず、狂四郎の地擦り青眼を視て、そのおそるべき吸引力を直感するや、咄嗟に、型をそのままに、受けに転じたのは、よほどの余裕をもっている証拠である。(中略)

やがて——。

浮き舟の構えの中から、無想正宗が、しずかに、小円を描きはじめた。そして、その円周は、徐々にひろがって行く。

その動きにつれて——無想正宗の切っ尖が上段に移れば、小太郎の構えは攻めの入り身になり、切っ尖が地擦りに向うと、矢止めに変わった。(中略)

「たあっ！」

孰れの口から噴いた懸声であったか。

小太郎と狂四郎の速影が、二つ巴のように飛び交った。

ぱっ——と血飛沫が、宙を彩った。

路上によろめき、虚空を掴んだのは、小太郎でもなく、狂四郎でもなかった。

女芸人の一人が、脳天から真二つに割られたのである。

その左右に——十歩の距離を置いて、小太郎と狂四郎が、それぞれの構えをとっていた。

小太郎の小太刀の切っ尖から、ぽとり、と血汐がしたたった。

狂四郎は、ゆっくりと構えを解くと、

「秘法・血汐薪、たしかに拝見した」

と、云って、無想正宗を腰に納めると、歩き出していた。

倒れている者のかたわらを過ぎがてらに、一瞥をくれると、その貌は、男のものに変っていた。くノ一の術を使って、女芸人に化けていた忍者だったのである。¹¹

この場面にみられるように、物語の後半から結末にかけて一流忍者と狂四郎との対決が描かれるのも、忍法小説の要素をかねそなえた『殺法帖』の持ち味といえる。忍者たちが平家、源氏、武田、上杉、真田の5流派を代表する凄腕ぞろいであるのは忍術・忍法の供覧の様相を呈しているし、影と称する真田流忍者が最後の強敵として登場するのも興味深い。柴田の時代小説の中で眠狂四郎シリーズとならぶ代表作として世評に高い伝奇忍法小説『赤い影法師』の主人公が影と名乗る忍者であり、『殺法帖』に登場する影は、代々その首領が影とのみ名乗るしきたりを持つこの一族の末裔と位置づけられている。しかもその影が隠れ切支丹として登場する点にも、転び伴天連の姦淫の子たる狂四郎の宿運との対比をみてとることができる。

ともあれ、これら剣の達人や手練たちとの対決を通じて、狂四郎の水際立った剣技と、その剣と表裏一体の関係にある心のありようが描き出される。むろん狂四郎の剣は、第一義的には対手をたおすための武器であるが、迫真の剣戟描写を通じて狂四郎の剣の流儀がクローズアップされることで、それが彼の内面を映し出す鏡としての役割をもはたしている。それを描く作者の配慮は周到で、まず一般論として剣というものに「過陽、才覚、術行、至静、至達」の五術があり、「この五術を、兵法者にあてはめることができる」ことが語られる。「過陽とは、巖をも砕く勇猛心を揮って、敵に立向うことである。才覚とは、敵を謀って撃つこと。術行とは、師伝の術とおのが工夫の術を合せて、勝ちを主とすること。至静とは、敵の隙を看て、撃つこと。至達とは、不動心の妙理をもって勝ちをとること。/およそ、兵法者は、過陽から出発して、至達の境に立つのを、神妙の道と心得ている。」しかしながら、「そういう五術を踏んで行く人々とは、全く異質の世界にいる」のが狂四郎であり、「剣に生きんがために、剣の修業をした」のではない狂四郎をして、¹² 自身の剣を次のように顧みさせるのである。

剣というものは、不動智神妙の心気をもってこそ、事理一体の働きがなし

得ると云われているが、おのれの場合は、全くその反対に、業念に呻く捨身を、石火の機に働かせて来た。邪剣であった。あくまで、その剣は、殺法であり、断じて、活殺自在三昧の境地とは、本源を異にしている。無想正宗を鞘走らせれば、必ず敵を斬った。

敵をゆるしたことは、未だ曾て一度もない。殺法をふるう輪廻の妄心をもって、おのが五体を地獄へ送ることをのぞみ乍ら、かえって、事理を極めて、常に死地をまぬがれて来た男である。

禅に謂う、拈華微笑の旨を得る一流達人とは、対極に立っている筈であった。¹³

狂四郎は「おのが業念を抑えるために、剣の修業を為しただけで」、「たまたま、おのれに、異常な天稟があって、円月殺法を生」むに到ったが、もともと「剣をもって身を立て、生涯をつらぬく志などいささかもなかった」こと、そして「剣の極意を会得せん」と修業を重ねる兵法一途の剣豪とはおよそ対蹠的な地点に立っていることが改めて読者に伝えられるのである。¹⁴

しかしそのことを認めたくえで、ここで同時に確認しておく必要があるのは、狂四郎が無慈悲な兇刃をふるうニヒリストのように見えながら、そのじつ彼の剣があくまでも受けを本質とするものとして性格づけられていることである。当主嘉門の妻女を殺害したのが狂四郎であると思ひ込んだ戸越家の老婆に執拗に命をつけ狙われながら、狂四郎がこの老婆に対して剣を振り下ろすことがないのも、このことと無関係ではない。いや、あえていえば子供や老人といった弱者に対するまなざしにこそ、彼の特異なアイデンティティを証しする特質の一端がある。「対手が悪党でない限り、自ら進んで刀を抜いたことは一度もない。これは、無頼者のわたしが、ただひとつ、おのれの心をいつわらずに言明できることだ」という科白が『無頼控』にあり、¹⁵ また『独歩行』でも「対手が、襲撃して来るまで、こちらからは、絶対に先に斬らぬ」身上が述べられているが、¹⁶ 狂四郎のこの身上は『殺法帖』でも変わりがない。狂四郎の剣構えの基本は、爪先三寸に切っ先を落とす地ずり青眼であるが、青眼の二文字を含むとはいえ、この構えは剣先を相手の目の位置に向ける中段の構えとは異質である。それは『大菩薩峠』の机竜之助が用いる“音なしの構え”と同じく、こちらから攻撃に出ることのない受けの太刀であって、陽刀としての青眼とは性格を異にしている——「青眼は、陽刀である。その尖鋒に、鋭気をほとばしらせて、

敵を威圧するのである。いまだ曾て、狂四郎は、これをえらんで、敵を斬って居らぬ。常に、敵から、仕掛けさせ、襲わせてこれを斬る——これが、この男の「剣の流儀であった。」¹⁷

狂四郎があみ出した円月殺法も、本質的には闘志や情熱を内にひそめるこの陰刀としての受けの太刀の延長線上に成立する。瀬戸内の孤島に隠棲し、若き日の狂四郎を指南した老剣客は「剣の道は、流通円転して終始するところなく、循環変転常なき、天地神意の表象であると教えた。」ところが狂四郎は自らの太刀をして無想剣たらしめず、「敵をして、空白の眠りに陥らしめる殺法をあみ出した。」¹⁸ すなわち「おのれ自身は、人の生命を奪う業念に呻きつつ、対手を、虚空の中に喪神せしめ、その喪神の状態から、撃って来るのを、一太刀に斬る」円月殺法である。¹⁹

「流通円転」や「循環変転」など“円”にまつわる考えや着想は剣の世界では格別新奇なものではないが、注目すべきは剣の虚実を内在させる円月殺法そのもののうちに、狂四郎という人間をめぐるさまざまな虚実が表象化されていることである。みずからについて語ることの少ない狂四郎が自己の心のうちを見つめる場面がある。

——おれの心には、救い難い懈惰がある。善きもの、美しいもの、純乎たるものに対して、ただの一度として、素直に、手をさしのべたことがないのだ。……おれは、ただ、人を斬りつづけただけだ。流血が鹵を漂わせる修羅場裡に、生甲斐のようなものをわきたたせて、狂いまわって、幾年かを、すごして来ただけではないか。²⁰

狂四郎をしてこう語らしめるとき、作者は狂四郎の内なる良心の呵責とともに、「善きもの、美しいもの、純乎たるもの」への痛切な憧憬が心奥に秘められていることを反語的に語っている。「善きもの、美しいもの、純乎たるもの」の価値を知りえない人間が、どうしてそれらへ「手をさしのべたことがない」「懈惰」を悔む必要があるであろうか。少年の日の狂四郎は、母と住まう寺の山内から一步も外へ出ることを許されなかった。しかし同世代の友を一人も持たない孤独な日々を送りつつも、手の平にのせた蟻がうろたえるさまを見てそつと地面にかえしてやるやさしさを持つ少年であった。それが20歳のとき、長崎への旅で自身の出生の真実を知って以来、「人並な幸せには目をそむけて」、「天

性の発露をことごとく阻止する術で、おのれを撰制」する生き方を選んできたのである。²¹ 「おれは、目を開いている間は、いつも、おのれを欺いている。いや、それとも、おのれに欺かれているのかも知れぬ」²² という狂四郎の独語は、彼が抱えるこの存在の背理と係わりがある。

こう考えてくるとき狂四郎の剣の精神には、やはり彼が「胸中に蔵する一片の冰心」、²³あえていえば失われた楽園への郷愁とでも形容すべき真情が秘められていると思われる。ニヒルな仮面をつけた狂四郎は決してウェットな感傷に流される人間ではない。その胸中には湿った感慨というよりも、索漠たる自意識の曠野がひろがっている。いやむしろ、その荒蕪の中の人知れぬ無辜の楽園へ痛切な憧憬を寄せているのが狂四郎であるというべきであろうか。狂四郎の孤独がナルシズムに隣接するようにみえながら、自己愛の感傷と一線を画しているのは、その冷たい虚無のまなざしが、モラリスムの鋭い刃となっておのれ自身にも振り向けられるからである。もともと狂四郎は虚無的な心の持主であったにもかかわらず、無垢への郷愁を胸に秘めているのではない。むしろ何ものかによって虚無の仮面を強要されたために、その役割をこそ自らの運命の星として選びとったのである。狂四郎が心底に秘め持つ無辜への憧憬が被虐的なモラリスムを招来するのは、おそらくこういう地点においてである。

IV

ところで、眠狂四郎作品をはじめ柴田の時代小説には、運命と人間をめぐるモチーフがくり返し立ち現れる。文字どおり運命の二文字を冠した『運命峠』という代表的な剣豪小説があるほか、運命との相克や運命の不条理性といった問題は柴田文学の中心的テーマといえるほどに多くの作品で取り上げられ、あるいは変奏されている。これは作家活動の初期から一貫してみられる傾向で、『無頼控』発表の前年にあたる昭和30年の12月に刊行された短篇集『偽処女』の「あとがき」には、次のような一節がみえる。

私の小説は、殆ど例外なしに、主人公を、異常な状態に追い込んでいる。(中略) げんに、本書に収めた作品中、『死』と無縁なのは、一、二篇しかない。どうして、こういうことになるのか、われながら訝しい。私は、べつに、人生の解決は、死ぬことよりほかにはない、と割切っているわけではないので

ある。

強いて云うならば、……主人公の人生を一応どうにか片づけるには、なにしろ彼（または彼女）を、異常な状態に追い込んでしまっているのです、死んでもらうよりほかに方法がなくなってしまうのである。すなわち、私が小説の中で考えていることは、「人間の運命」ということだけだからである。²⁴

「主人公を、異常な状態に追い込」むとは、その人物を生死のはざまに立たせるということであり、さらにいえば死と隣り合わせの運命といかに対峙させるかという命題とも重なり合う。もとより焦点の絞り方は一様でなく、数奇な宿命を背負う主人公の孤独に力点が置かれることもあれば、人物をとり巻く運命の気まぐれや反語性が強調される場合もあるが、いずれにせよ主人公の前に立ちどかる運命の力が強大で抗いがたいものであればあるほど、それと向かい合う人間の力量が問われ、孤独な実存としての^{シルエット}影像が否応なく浮かび上がることになる。

このことは小説造型の観点からみれば、登場人物の生きざまやヒロイズムを際立たせるうえで、過酷な運命に翻弄される人間を描くことが捷徑であるとの認識に通じるであろう。仮借ない運命を描くことによって、そこに自ずから人としての尊厳や身の処し方があらわになるからである。陰翳の階調に濃淡の差こそあれ、翳のある孤独な主人公が招来されるのはこういう文脈においてであり、眠狂四郎作品では主人公の特異な出生がそれに輪をかけて、いつそう屈折したかたちでモラリズムの一類型としてのダンディズムが顕在化するのである。

眠狂四郎が季節の別なく黒羽二重を身にまとうのは故なきことではない。狂四郎の身をつつむ黒は、不幸な星のもとに生まれた彼の宿運を暗示する色であり、その存在の哀しみをおし隠すように、彼は黒羽二重を着流すスタイルをつらぬく。「わたしには、不幸な育ちかたをした者のみが持っている翳が、わかるのだ。わたし自身のひねくれた根性が、この識別に、役に立つ」²⁵——遊女の子として薄倅の人生を歩んできた千佐に狂四郎はこう言葉をかけるが、こうした科白を介して千佐の不幸な境涯とともに、狂四郎自身の来し方が浮かび上がる。彼が不幸な身の上に生い育ったことは先述したが、転び伴天連となったオランダ人医師が、捕縛を指揮した幕府大目付への意趣返しに大目付の長女を犯して生ませた姦淫の子が狂四郎であり、その狂四郎へ恋慕の情を募らせる千佐は早

世して、狂四郎の母と、妻の美保代と、従妹の静香の三人が眠る渋谷の丘陵上に埋葬されることになるのである。

狂四郎の代名詞ともいえる黒の着流しスタイルは、しかし、彼が背負う宿命を暗示するだけでなく、彼の内なる精神の構えの、あるいは身に鎧う知的擬装としてのダンディズムの表徴ともなっている。ボードレールが『赤裸の心』に記したように、「鏡の前で生き、そして眠る」²⁶ 苛烈な自意識がダンディズムの成立要件のひとつであるとすれば、狂四郎の精神像を規定しているのは紛れもなく近代的ダンディとしての資質である。「一瞥して、対手がどんな素性の者か、判断をつける鋭い直感力をそなえ」²⁷ る 狂四郎は、「どんな微かな気配でも、察知するために、神経を冴えさせてい」²⁸る。「靈感に近い鋭敏な神経の働き」²⁹をわがものとしている彼は、「ねむりつつも、本能となっている神経は、冷たく冴えているのである。」³⁰ 神経が「冷たく冴えている」とは、脳裡が冷たく醒めていることを意味し、そこには冷厳な知性に裏づけられた確固たる意志と果敢な決断力が働いている。

ダンディとしての狂四郎のこうした意志と決断が何よりも明確に示されるのは、彼の身に危難が迫ったときである。

之を毫釐ごうりに先すれば差たがうに千里を以てす。

あるいはまた、

初め有らざるもの靡なし、克よく終り有るもの鮮すくなし。

運命というものの終始に就いて、この男が、無頼の行状を重ねるうちに、いつとなく知ったことは、これらの言葉が含む残酷であった。そして残酷と知るが故に、この男は、おのれの刹那の予感を、重く量る生きかたをえらんでいる——。³¹

狂四郎の運命観は『無頼控』の中でこう記されているが、いざという時にのぞんでの狂四郎の身の処し方は『殺法帖』でもくり返し表明されている。

わたしは、いったん乗りかかった船には、乗れば生命が無いと判っていても、乗ってみる男だ。³²

いつ、どこへ、屍をさらしても、悔いぬように、虚無という支えが、身の裡にはある男であった。³³

「予言は忝いが、わたしは、これまで、陥穽と知りつつ、出かけて行く時、生きて還ろうと思ったことはない。」³⁴

無限かと思われる白皚々の平野が、行手にひろがっていた。
狂四郎は、歩き出した。

しりぞくことを知らぬ男にとっては、それは、進むべき唯一のわが道であった。³⁵

物語の要所要所で見出されるこれらの科白や叙述は、眠狂四郎という人間の行動規範を端的にあらわしている。「運命というものの終始」を「残酷」とみる見方にもかかわらず、いやむしろその「残酷」を知るがゆえに、狂四郎は「おのれの刹那の予感を、重く量る」生き方を選びとる。それは彼が運命に対して決して背を向けない人間であることの証左であり、したがって「いつ、どこへ、屍をさらしても、悔いぬ」という姿勢も、「いささかも、明日を生きようとしては居らぬ」³⁶ という表白も、けっして世をすねた人間の強がりではなく、つねに退路を断った生き方をしている者の覚悟にもとづくものにほかならない。別言すれば狂四郎は自分に対して絶対に言い訳をしない男であり、生死の岐路に立つ彼の孤影を際立たせることによって、運命との、そして死との対峙が、凝縮された生のすがたをとって表現されるのである。

ここで改めて狂四郎の剣の流儀について再考するならば、円月殺法が陽刀ならぬ陰刀としての性格をそなえていることは、かなり象徴的な意味を担っている。みずからは虚空に円を描き、敵をして喪神状態に陥らしめる円月殺法の流儀は、元和偃武以来の諸流派の伝統から逸脱しつつ、なおもその独特の太刀筋に、陰から陽へ転じ、再び陰へと立ち還るサイクルを内在させている。いや、陰と陽のダイナミズムばかりではない。円月殺法には一見対立概念と見られがちな多くの二項群が併存している。そもそも陰刀のうちに陽刀を内包するその剣のあり方自体、それをふるう人間の背理をも表象している。狂四郎の佩刀は、鎌倉末期の刀工岡崎五郎入道正宗によって鍛えられ、豊臣秀頼の愛刀であったとも伝えられる名刀であるが、³⁷師から受け継いだこの太刀を狂四郎は無想剣た

らしめず、対手を喪神せしめる魔劍とした。いわば虚無の仮面の下に有情をひそめる人間によって、無想正宗は虚空に円を描くのである。その吹毛の劍は、切っ尖が象る円弧から対手の胸を薙ぎ払う直線的一閃へと変転し、しかもその刀身には光と闇、夢とうつつ、生と死、刹那と永遠が交錯するのである。

だがここで翻って考えてみると、虚実にせよ、陰陽にせよ、光と闇にせよ、これら二つは互いに相容れない対立概念であろうか。陰の中に陽があり、静もまた動を内包しうる。とすれば、これら二項は狂四郎の劍と心に具わる不可分一体の内実であり、対立概念というよりもむしろ互いを補い合う補完物ともいえるのではないか。もとより狂四郎は、これら二項のいずれか一方にのみ与するような単純な人間ではない。それら両極の境界上に自己の存在の拠り所を見出して危険な綱渡りを演じてきたのが狂四郎であり、だからこそ至妙の平衡感覚を発揮して幾多の死地をくぐり抜けるその生きざまに、ダンディの面影が重なり合うのである。狂四郎が胸底に秘めた童心の無垢が倫理的なマゾヒズムと隣接するのはこういう地点においてであり、ほかならぬ作品自体のリアリティも、このような正反の弁証法によって支えられているのである。

V

生前、柴田と親しかった直木賞作家の半村良によれば、柴田は「旅先などで揮毫を頼まれたとき、『劍』の一字を中央に書き、右下に署名」をしていたという。³⁸「劍の真髓は、おのれの心身を、生死の境に置くことにある」という柴田の言説は冒頭に引用したが、この劍の精神は柴田が奉じていたダンディズムの美学にも通底するものを持っている。というのは、劍の精神もダンディズムの美学も、畢竟するところ個人としての行動規範に立脚した存在方式そのものだからである。『地べたから物申す——眠堂醒話』に収められたエッセイ「わが生涯の中の空白」で、柴田は自身の戦時体験——「昭和20年4月、輸送船がバシール海峡で、潜水艦に撃沈され、漂渺たる大海原を流された」経験——に触れ、文筆を生業とする身でありながら、海面を漂ったその数時間の空白を埋める記憶のないことを嘆いたうえで、フランスの文人ヴィリエ・ド・リラダンに言及して次のように記している。

ギリシャ王位継承権を要求し得るほどの大貴族の家に生れ乍ら、リラダン

は、セーヌ河の橋の下で、乞食や浮浪者にまじって、夜をすごし、水でうすめたインキに羽ペンで「残酷物語」を書き、

「地球という一遊星のこともたまには思い出してやろうよ」

と、うそぶく豪宕の気概を、みじんも失わなかった、という。

今日のパンにさえありつけぬ、洗うがごとき赤貧の橋下ぐらしで、その夢想を、いよいよ壮麗にして典雅なるものに昇華させたリラダンならば、愚劣な戦争の犠牲者となったその時、おそらく、すばらしい夢想と痛烈な嘲罵の言葉を生んだに相違ない。³⁹

これが柴田の心眼に映ずる“ゾルレン”としての人間のすがたであった。もちろん、このような人間像を抱懐するにいたった背景には、自身の戦争体験だけでなく、戦後日本の現実も影を落としていたかもしれない。「独語」と題されたエッセイの中で、柴田は「大正生まれの、青春を戦争でつぶしてしまった世代」の「まことになさけない、中ぶらりんの存在である劣等感」を次のように嘆いているからである——「当時の焼跡をうろつくのは、日和下駄では不便であったし、カストリを飲んでいれば、通人をなつかしむわけにいかなかったし、荒れすさぶ浮世の風に肩をすくめては、後世を弔う根性にはなれなんだ。さりとて、総バナ式のデモクラシーを、『進歩』だなどとは、舌がねじくれても、いえはしなかったのである。」⁴⁰

しかし、このような世界観・人生観を醸成した要因がどのようなものであったにせよ、柴田は戦後の時代小説界に新たな地平を切り拓き、かすかすの剣豪小説を世に問うて読者の期待に応えつづけた。そこには、剣に生きる孤独者の生きざまを通じて剣の真髄を描き出そうという柴田の小説美学を見てとることができるが、わけても特筆すべき功績は、日本古来の剣の精神に近代的ダンディズムの精神像を噛み合わせることによって、暗い業念を背負い、しかもすぐれてスタイリッシュな個性をそなえた眠狂四郎という作中人物を生み出したことであろう。

むろん眠狂四郎の剣が断つのは、何よりもまず彼に襲いかかる仇敵や刺客たちである。だが、それですべてが尽きるわけではない。みずからの暗い宿運を断つように、狂四郎は無想正宗を一閃させる。いやむしろ時代の現実そのものと斬り結び、その捉まえようのなさを、狂四郎は、そして作者は円月殺法のうちに封じ込めようとしたともいえるのではないか。「わが小説 II 『眠狂四郎無

頼控』というエッセイの中で、柴田は次のようなつぶやきを洩らしているのである。

「眠狂四郎」のアクロバティック的剣術を、バカバカしいとわらいすてるむきは、二十年前、原子爆弾の話をきいても、やはり、一笑にふしたに相違ない。狂四郎の剣が、原子爆弾という新しい凶器に対するささやかなヒューマニズムであることを、どなたもお気づきにならぬとすれば、それは作者の手段があやまっているのかも知れぬ。⁴¹

「優れた表現者は孤独を友とし、仕事を通してしか幸せは得られないという宿命を背負っている。表現者が幸せを望むなら、自らの生き方を反映した自分らしくふるまえる作品に出会うしかないのかも知れない」⁴²——これは生前の柴田と親交があり、のちに小石川伝通院（無量山寿経寺）に柴田の墓を設計することになった美術家横尾忠則氏の評言であるが、この横尾氏の言にならっていえば、「孤独を友とし」た“表現者”柴田錬三郎にとって、眠狂四郎作品こそは、まさしく「自らの生き方を反映した自分らしくふるまえる作品」にはほかならなかった。

注

1. 柴田錬三郎「まえがき」『生死の門』集英社〈文庫〉、1978年、3頁。
2. 柴田「武蔵・弁慶・狂四郎」『新篇眠狂四郎京洛勝負帖』集英社〈文庫〉2006年、275頁。
3. 柴田「修業について」『どうでもいいことばかり』集英社、1978年、86頁。
4. 柴田「武蔵・弁慶・狂四郎」『新篇眠狂四郎京洛勝負帖』289頁。
5. 「眠狂四郎無頼控」の『週刊新潮』への連載が始まったのは昭和31年であるが、百話完結の翌年にあたる昭和34年には「眠狂四郎無頼控・続三十話」が書き足され、現在では計百三十話からなる『眠狂四郎無頼控（一）～（六）』（新潮文庫）として流布している。
6. 狂四郎の行く手を阻むのが公儀隠密や加賀藩士ばかりでなく、忍びの流派を代表する術者たちや忍者修業にもまさる訓練を受けた「水戸天狗」の面々であるのも、日陰に生きる者たちの宿命に光をあてた『独歩行』に通じる趣きがあるといえるかもしれない。英雄・傑物よりも影に生きる無名者たちを好んで題材にした作者のまなざしが、『殺法帖』でも感じられるからである。
7. 秋山駿「解説」『柴田錬三郎選集第十八巻 随筆・エッセイ集』集英社、1989年、493-494頁。

8. 柴田「劇画について」『どうでもいいことばかり』171頁、秋山駿「柴田錬三郎論剣の魅力と柴田錬三郎」『時が流れるお城が見える』仮面社、1971年、307頁、等を参照。
9. 柴田錬三郎「海辺の決闘」『眠狂四郎殺法帖 下巻』新潮社〈文庫〉、1975年、70頁。
10. 一刀流については、次のような解説が添えられている——「一刀流は、威（不転の位）移（棒心の位）写（水月の位）をもって成る。威とは、静にして勢を含む。移は、過不足なく左右に転じ守る。写とは、残心の位で、無念にして敵の想を写しとることである。／一剣一理を主として、一心不易の極にいたるといふ旨趣によって、一刀流と名づけられている。すなわち、一を以て、敵の二に応ずる。撃って受け、はずして斬ることである。そうではなく、受けて撃ち、外してから斬るのでは、敵の二に対してこちらも二であり、勝敗の結果はわからぬ。一を以て二に応ずることこそ肝要である。」柴田「北辰一刀流」『眠狂四郎殺法帖 下巻』137頁。
11. 柴田「富田流小太刀」『眠狂四郎殺法帖 下巻』236-239頁。
12. 柴田「影法師」『眠狂四郎殺法帖 上巻』137頁。
13. 柴田「花と小舟」『眠狂四郎殺法帖 上巻』303-304頁。
14. 柴田「北辰一刀流」『眠狂四郎殺法帖 下巻』136頁。
15. 柴田「おろか妻」『眠狂四郎無頼控（三）』新潮社〈文庫〉、1976年、312-313頁。
16. 柴田「黒い爪」『眠狂四郎独歩行 上巻』新潮社〈文庫〉、1976年、12頁。
17. 柴田『眠狂四郎無頼控（六）』新潮社〈文庫〉、1977年、205頁。
18. 柴田「無想正宗」『眠狂四郎無頼控（一）』新潮社〈文庫〉、1976年、183頁。
19. 柴田「雪女郎」『眠狂四郎殺法帖 下巻』198頁。
20. 柴田「花と小舟」『眠狂四郎殺法帖 上巻』305-306頁。
21. 柴田「能面頭巾」『眠狂四郎無頼控（四）』新潮社〈文庫〉、1977年、261頁。
22. 柴田「悲愁の丘」『眠狂四郎無頼控（三）』新潮社〈文庫〉、1976年、127頁。
23. 柴田「黒い爪」『眠狂四郎独歩行 上巻』14頁。
24. 柴田「あとがき」『偽処女』鱒書房、1955年、214頁。
25. 柴田「遊女の子」『眠狂四郎殺法帖 上巻』65頁。
26. シャルル＝ピエール・ボードレー「赤裸の心」『ボードレー全集VI 内面の日記 書簡 年譜 索引』阿部良雄訳、筑摩書房、1993年、43頁。
27. 柴田「美女放心」『眠狂四郎殺法帖 上巻』9頁。
28. 柴田「風の如くに」『眠狂四郎殺法帖 上巻』25頁。
29. 柴田「修羅場」『眠狂四郎殺法帖 下巻』37頁。
30. 柴田「梓巫女」『眠狂四郎殺法帖 下巻』209頁。
31. 柴田「能面頭巾」『眠狂四郎無頼控（六）』新潮社〈文庫〉、1977年、19頁。

32. 柴田「遊女の子」『眠狂四郎殺法帖 上巻』60頁。
33. 柴田「虚無僧寺」『眠狂四郎殺法帖 上巻』82頁。
34. 柴田「無頼善人」『眠狂四郎殺法帖 上巻』285頁。
35. 柴田「おのが道」『眠狂四郎殺法帖 下巻』225頁。
36. 柴田「修羅場」『眠狂四郎殺法帖 下巻』37頁。
37. 『無頼控』に、狂四郎が無想正宗に見入る場面が描かれている——「いま、狂四郎がじっと見入る無想正宗は、一点のくもりもなく、沸えも匂いも深く、地はあくまでも澄んで青く、刃はあくまでも白い。／虚無の業念とはかかわりなく、名刀は依然として美しく冴えているのである。」柴田「無想正宗」『眠狂四郎無頼控（一）』189頁。
38. 半村良「解説」『地べたから物申す』集英社〈文庫〉、1995年、244頁。
39. 柴田「わが生涯の中の空白」『地べたから物申す——眠堂醒話』新潮社、1976年、127-128頁。
40. 柴田「独語」『柴田錬三郎選集第十八巻 随筆・エッセイ集』191頁。
41. 柴田「わが小説II 『眠狂四郎無頼控』」『柴田錬三郎選集第十八巻 随筆・エッセイ集』201頁。
42. 横尾忠則「書評『高倉健インタビューズ』」『朝日新聞』2012年9月30日付、14面。

(信州大学 全学教育機構 教授)

2013年1月12日受理 2013年2月11日採録決定